



Character

聖女フィーネ

侯爵令嬢でありながら類まれな治癒の力の持つ聖女。見る者を魅了してしまう絶世の美少女だが本人は自身的美貌に無自覚。

慈愛にあふれた性格で、自分より他人を大事にしてしまうためつけこまれやすい危うさがある。

いつも女護衛騎士に守られているせいか色恋や性的なことには疎い。

本人は気づいていないがとびきり感じやすい体質で無意識で男が悦ぶ反応をしてしまう。

慌ててフィーネも席を立って後ずさる。しかし思うように足が動かない。

「まずは、フードを取って噂の美貌を見せてみる」

大股のエコンドは一步で距離を詰めると、フィーネの顔を隠していたフードをはず取った。

勢いで体勢を崩し、そのまま壁に背中を打ち付ける。

(いっつ……ッ)

——絶対にフードを脱がないでいただけますか？

停戦交渉に臨む前、エラが掛けてきた言葉を思い出しハツと顔を上げる。

呆然とした表情で静止するエコンドと目が合った。

こちらを見つめるその瞳に、醜悪な色が宿った気がしてフィーネは肩を縮こませる。

(この人から、離れないと——)

しかし一瞬で間近に迫ったエコンドが、片手でフィーネの両手をねじり上げ

た。

「いつ……」

痛みに声を上げそうになり、うつむいてこらえる。

するとエコンドはもう片方の手でフィーネの顎あごをくいと掴み、覗き込んできた。

「ほう……噂以上の美貌だな。スパイが殺すには惜しいとしつこく迫ってきたのも頷ける。この私が、成人前の小娘に昂たかぶるとはな」

両手首の痛みに思わず涙がにじむ。

（まだだ、あと少し。それまで耐えないと）

「涙目も、そそる。この絶望的な状況で目に光を失っていないのもいい。我が帝国で慰みものとして献上し、いずれは聖女を量産する孕み袋となってもらう予定だったが……その前に味わってみたいと思ったのは初めてだ」

ゾクリ——とフィーネの背中に悪寒が走った。



顎あごを掴んでいたエコンドの手が、ゆつくりと首筋に触れ、なぞりながら下りていく。

(う、気持ち悪い……!)

自由になった顔を思わず背ける。

(離れたい。これ以上この人を見たくない。早く、ここから逃げないと……)

「くくく」

エコンドは思わぬ戦利品に、興奮を隠せなかった。

嫌がるフィーネを見ていると嗜虐心がゾクゾクと沸いてくる。

噂には聞いていたフィーネの美貌。それは帝国上層部でも耳にした。年端もいかぬ娘に酔狂なものだと思っていたが……実際に目にしたフィーネにエコンドは見惚れてしまった。

肌は雪のように白く、きめ細やか。綺麗なアーモンド型の目元は、全てを受け入れるように優しく、芯の強さも同居している。

桃色の唇は柔らかく弾力がありそうで、本能的に吸い付きたくなる。

今までの人生で、これほど美しいものを見たのは初めてだ。世の男なら、いや女であっても一目見ただけで魅了されてしまうほどの美少女だ。

容貌の美しさもさることながら、その表情やまだ発達途上の体からも、そこはかとなしい色気を放っていた。

心根の無垢さや清らかさが、その声や言動から伝わってくる。

穢してみたいと獣欲が奮い立つには十分すぎた。

「邪魔だな」

エコンドは、フイーネを守っていた厚手のローブの首元を掴むと、留め具を力まかせに引きちぎった。

ローブの前がはだけ、無骨な革の胸当てと膝丈のスカートがあらわになる。エコンドは面倒そうに胸当てに手をかけると、それも難なく引きちぎり、ぽいと放つ。

「うっ……」

フィーネは、自分の衣服が乱暴に剥がされていくのを、目頭に力を込めて必死に耐えた。

ぴたりと肌に密着する純白のブラウスは、胸元にかけてなだらかな丘陵を描き、腰に向けてしなやかにくびれている。

魅惑的なふくらみがフィーネの荒い吐息に合わせて、上下に揺れていた。

胸当てを引きちぎられた際にブラウスのボタンもいくつか外れ、その隙間から雪のような生肌が覗いている。

しばし、フィーネの吐息の音だけが部屋に充満した。

エコンドはごくりと唾を飲み込む。

「これは、たまらないな」

フィーネの両手首を左手で掴んだまま、もう片方の右手でブラウスを引っ張ると、力任せに暴いた。

「やつ……」

ボタンが弾け飛び、床に落ちる。

左右に開かれたブラウスから、フィーネの下着があらわになる。

胸元とウエストまでを包むベージュのロングラインブラは、頼りなく彼女の素肌を隠していた。

「服の上からは分からなかったが、小娘の割に意外といい体をしている。抱き心地も良さそうだ。……貴族の令嬢が、どこまで耐えられるかな？」

エコンドは鼻から息を吐きながら手を伸ばし、ブラ越しにフィーネのふくらみに触れた。軽く揉んだだけで、確かな弾力と柔らかさが伝わってくる。

「触り心地もいい」

エコンドは、フィーネの胸全体を忙しなく撫で回しながら、時おり大ききや弾力を確かめるように指を押し込んだ。

その執拗な手つきに、フィーネは今まで味わったことがないほどの嫌悪感に

襲われる。

(やだ、気持ち悪い。触られたくない……!)

唇を引き結び、顔を背け、恥辱と嫌悪感に耐える。

「その顔もいいな……もつと虐めたくなる」

目に涙を浮かべ、汗ばむ体をピクツと震わせるフィーネの反応に、エコンドは夢中になった。

やがて、彼女のふくらみを這い回っていた手が、わずかに突起した部分を見つけて出す。親指でゆっくり捏ねると、彼女の口からわずかに空気がこぼれた。

「ふっ……んっ……」

エコンドはフィーネの硬くなった乳首を布越しにいじりながら、彼女に顔を近づけ、美貌が歪むさまを堪能する。

やがて小突起を捏ねくりまわしていた親指に人差し指を添えると、きゅっと摘まんだ。

「やつ……いや、だ……」

フィーネは電気ショックを受けたような痺れを感じ、思わず悲鳴をあげてしまふ。

その苦しげな、切なげな艶声に、エコンドの獣欲が理性を凌駕する。ブラジャーを掴むと、思いきり縦に引き裂いた。

「やあつ……」

ついにフィーネの白い素肌が、外気に晒される。

破れたブラジャーを左右に開くと、エコンドはその肢体に目を奪われた。

形のいい乳房は成熟しきつてはいないものの、男の欲望を受容できるほどには膨らみをたたえている。

その中心には素肌との境界線が曖昧な、薄桃色の乳輪がうつすら浮かび、その真ん中で可愛らしい突起がピンと主張していた。

柔らかそうな乳房も、吸ったら甘そうな乳首も、どちらも美味そうに見える。

腰は綺麗にくびれており、一本線のへそも美しく、また淫靡だった。

少女から女に変わる途中の、未成熟ゆえの妖しい色気。

エコンドは思わず生唾を飲み込む。

「美味そうな体つきをしている」

これまで女も男も数多く犯してきたエコンドだったが、これほどまでに情欲をそそる裸身を見たのは初めてだった。

「時間をかけて、たっぷり味わってやろう」

言うなり、フィーネの白い乳房に手のひらを押し当てた。

手の中にすっぽりと収まった温かいふくらみを揉むと、指をどこまでも受け入れるような柔らかささと押し返すような弾力を感じる。

「あっ……やめ、て……ううっ」

指と指の間で硬くなった乳首をコリコリと捏ねると、フィーネはその度にビクリと震え、目に涙を滲ませた。

この世のものとは思えない美貌を讃えた、無垢な聖女。しかも貴族として大事に育てられてきたであろう体を無理やり蹂躪しているという実感に、エコンドは味わったことのない興奮を得ていた。

「くっ、う……」

エコンドの責めに耐えながら、フィーネは部屋に張り巡らされた魔力封じの結界の解除を試みていた。

（もう少し……で、封印が解ける……よし、できた！）

解除に成功し、防護魔法を展開しようとする魔力を込める。

展開すれば、エコンド一人くらいなら容易く吹き飛ばすことができるだろう。

「チツ……」

フィーネの意図を察知したエコンドは、衝撃に耐えるべく咄嗟に身構える。その時、建物に帝国兵が駆け込んできた。

「エコンド様、敵の女を捕えました！ 単騎です。我が精鋭二名を葬った騎士

です！」

(エラ……!?)

フィーネは顔を上げ、帝国兵のほうを向いた。

彼女の瞳に、動揺と驚愕の色が浮かんでいるのをエコンドは見逃さない。フィーネの様子を見て瞬時に頭を巡らせると、ゆっくり振り返って帝国兵に命じた。

「なぶ 翳^{なぶ}って、痛めつけて殺せ」

「待って！」

咄嗟にフィーネが叫んだ。

帝国兵は、エコンドの命令にしばし返事をする事ができなかつた。

信じられないほどの美貌をたたえた少女が、その魅惑的な乳房を無骨な手で揉まれながら、こちらを見て懇願してきたからだ。

涙に濡れた美しい瞳と、目が合う。帝国兵は一瞬でフィーネの虜になった。

そのあまりに煽情的な光景に股間を硬くして立ち尽くす。

「待って、お願い……！」

フィーネは、なおも帝国兵に訴えた。

エコンドは彼女のほうに向き直ると、いやらしい笑みを浮かべる。

「ふむ……それはお前の態度次第だな。とりあえず、その防護魔法をおさめてもらおうか」

「くっ……」

フィーネは唇を噛んで、エコンドを睨みつける。

エコンドはそんな彼女に内心で感心していた。この絶望的な状況でも望みを捨てず、状況を打開しようとしてきたのだ。

そういう芯のある女は嫌いではない。ぜひ、ぐちゃぐちゃに犯し、この意思の込もった目を絶望で塗りつぶしたい。

「魔法を、解きますから」

フィーネは、防護魔法を解いたとき自分がどんな目に遭うかをうつすらと理解していた。今よりもっと酷い目に遭うことを。

それでもエラの命を天秤に掛ければ、結論は明白だった。

(今は……私が耐えるしかない)

フィーネは魔力を解くと、悔しさをにじませながら顔を背けた。

「くくく……それでいい」

エコンドは満足そうに笑うと、振り返ることなく帝国兵に告げる。

「出発の準備だ。精鋭二十人を付けろ。行け」

「はっ！」

氷のように冷たいエコンドの声に帝国兵は我に返り、飛び上がるように駆けて行った。

「さて、続きといこう」

エコンドは一度ファイネの胸から手を離すと、懐からナイフを取り出す。それを彼女の頬に滑らせた。

「うっ」

ファイネは、生まれて初めて刃物を肌に突きつけられる恐怖に思わず目をつむる。

「この美しい柔肌を傷つけられたくなければ、じっとしている」

そう言うと、エコンドは一度ファイネの両手を放した。

ファイネの腕が下がると、肩に掛かっていた厚手のローブをはたいて落とす。所々破けたブラウスも強引に剥ぎ取ると、彼女の小さい体が左右に揺れた。ファイネは目を閉じ、唇を噛み、必死に屈辱に耐えた。それがエコンドを余計に滾たぎらせるとも知らずに。

残るは肩にかろうじて引つかかった、引き裂かれたブラジャーの切れ端だけだった。

エコンドはそれにも手を伸ばしたが、思い直す。

「これは、残しておいたほうがそるか」

エコンドは再びナイフを向けると、フィーネの頭上の壁に突き刺した。剥ぎ取ったブラウスを縄のようにして、ナイフの柄に細い両手首をくくり付ける。フィーネはバンザイの格好で自由を奪われ、なすすべなくその妖美な上半身を晒すことになった。

「さてフィーネ嬢、口付けはしたことがあるかな？」

エコンドが、ぷるんとした下唇を指でなぞる。

フィーネは全身に鳥肌がたつのを感じた。あまりのおぞましさに、唇を固く引き結ぶ。

「くく、やはり生娘か。ではその唇も存分に味わうとしようか」

言うなりエコンドはフィーネの唇に吸い付いた。

「んむツ……んっ……やつ、あむっ……んう」

顔全体を押し当てるようなキス。

フィーネはエコンドの口付けから逃れようとするが、ぐつと顎あごを掴まれる。

「じつとしていると言っただはずだ。あの女騎士がどうなってもいいのか？」

ビクツと肩を震わせたフィーネは、やがて唇の緊張を解いた。

その瞬間、エコンドの舌がフィーネの唇の隙間をこじあげ、強引に口内に侵入していく。

「んあつ……やあ、んツ……んゆう……あ、んむツ……んつやあツ……あむつ、んん……っ」

フィーネの小さい舌を舌で捕らえると、絡みつかせてその味を堪能した。穢れを知らない少女の口内を蹂躪する征服感に、エコンドは酔いしれる。

「んうツ……えあつ、んつく……う」

(嫌、だ……この人のペロが、口のなかで……気持ち悪い)

自分は口を含むことがなかった紅茶の香りが、エコンドの吐息や舌を通して

広がる。フィーネは自分の口内で暴れまわる軟体生物に、強烈な嫌悪感をもよおしていた。

ちゅぱ、じゅる……と、粘膜と粘膜が重なり合う音が室内に充満する。

エコンドは捕食するかのようにはフィーネの唇をむさぼり、口内をかき混ぜ、甘い唾液を吸い上げた。

「たまらん、じゅる、ちゅう……ぷはあ、はあっ……フィーネ、たまらん……たまらん女だ」

エコンドは息継ぎをするためにフィーネの唇を解放した。乱れきった息が、互いの顔を温める。

フィーネは窒息寸前で朦朧としかけていたが、空気を吸い込んだことで意識を取り戻す。

「はあ……ん、はあ……も、やめ……」

しかしフィーネが口を開いた途端に、エコンドはその口内へまたも舌を差し

込んだ。

「んむうつ、……っ、やあッ、んぐっ……んむうつ、んっ、んんッ……」

彼女の後頭部を掴んで顔を上向かせ、今度は舌を根元まで挿入した。

小さくて柔らかい舌をのろのろと舐め回し、思いきり吸引し、自身の口内へと引っ張り込む。

「……ん、ぐっ……んぷあ……んぐっ、うつ……」

(くるしい、息……できない)

フィーネの口内がエコンドの大きな舌に埋め尽くされる。どちらのものか分からない唾液が口端からあふれ、糸を引きながら乳房に垂れ落ちた。解放されたと思っても、一呼吸置いてすぐに口を塞がれる。その繰り返しが続いた。

そのたびにフィーネは苦しげにうめき、エコンドをより興奮させた。

「んっ、く……う、んあ……んっ、ぷあ、っ……」

フィーネとのキスに満足したのか、エコンドはようやく顔を離れた。

肩で息をする彼女の裸体を見やると、今度はその体を味わっていくことにした。舌を伸ばし、フィーネの細い首筋に這わせていく。

「ふっ……んっ、いやっ……」

彼女が顔を逸らすと、さらさらした蜂蜜色の髪がエコンドの額をくすぐった。甘く香ばしいうなじの匂いがふわりと立ちのぼる。

「はあ……いいな。最上級の女の香り……男を狂わせる匂いだ」

白い首すじを強く吸い、蹂躪の赤い印を刻んでいく。

続いてバンザイの格好で露出している二の腕に顔を近づける。ふにふにした二の腕に吸い付くと、そのあまりの柔らかさに夢中になった。

「んっ……やだっ、やめ、て……」

赤子のようにきめ細かい柔肌の舌触りがたまらない。透き通るような二の腕を何度も吸い、舐め上げながら徐々に顔の位置を下げていく。

そしてフィーネが一度も責められたことがないだろう腋の下ををれろんと味見

した。

「ううっ……いやっ、そんなところ……舐めない、でっ」

腋の下を這い回るざらざらした舌の感触に、フィーネは耐えきれず身をよじる。こそばゆさと気持ち悪さに震えが止まらない。

エコンドはフィーネの汗をすべて吸い取るように、いやらしい音を立てながら執拗に舐め回した。腋の下のくぼみを舌先でえぐり、彼女が身悶える様子を楽しむ。

やがてエコンドの舌は脇腹に寄り道しながらも、ついにフィーネの白い乳房に到達する。

「くく……色も形も最高だな。小娘の分際で、美味そうな乳をしている」

フィーネの柔らかい乳房を両手ですくい上げると、犬のように舌を伸ばす。舌腹をふくらみに密着させると、一気に舐め上げた。

「えろん、れろん……んまい、美味しいなお前の乳房は」





「んっやあッ……んんっ、あっ……うっ、んんッ……」

(やだ、嫌だ、胸……くすぐりたい、きもちわるい、へんな感じがして……っらい)

エコンドはおっぱいの輪郭を確かめるように、外周をれろおと舐め回す。

舌で円を描きながら徐々にふくらみみみ中心部に向かっていくと、その柔らかさと舌を押し返すような弾力が増していった。

「やだ、舐めない、でえ……んんっ、う……くううっ」

淡い乳輪を舌尖で舐めると、フィーネの悲鳴は苦しげながら切ないものに変わっていた。

その微妙な反応の変化をとらえたエコンドは、いよいよフィーネの薄桃色の蕾をちろりと舐め上げる。

「ひうっ、やあッ……」

ここはフィーネの弱点のようだ。